

暗雲低迷して月光がぼやけてゐる夜中の二時私は家を出た。町も村も未だ熟睡してゐた。自然に心身共に清々しく緊張してゐた。學校から大阪に着く迄の行程は無事緊張裡に終へ淀川公園に到る。此處で本縣出身の先輩の方々から歓迎を受けた。又知事の訓話に一層心が引締つた。

式場に着いた頃天候は愈々險惡になり風もきつくなつた。練兵場は泥濘して荒れてゐた。併し今日こそ光榮の日、雨何者ぞ風何者ぞ。私の心は張りきつた。寒さも感じなかつた。此の時畏れ多くも我々青年と共に此の雨、此の風に曝されようとの陛下の御思召の程を承つた。私は一陛下の有難さ勿体なきがしみく、と身に泌みだした。我が國体の秀れてゐる所以がはつきりと判つた。

暫くして豪壯な君が代の響。陛下が出御遊ばされたのだ。我々は捧げ銃をした。私の銃を持つ手は微に顫へた。其れからは何も彼も忘れて了つた。雨も風も泥濘も號令も軍樂も、全く無我の境であつた。私はいつしか玉座近く歩んでゐた。中隊長の刀が僅に反射して降りた。私は注目した。私は陛下の直立不動の凛々しい御姿を拜したのだ。思はず体の熱くなるのおぼえた。そして熱い涙の爲に御顔の程は眩と拜し得なかつた。舊の位置に歸つた時私は始めて我に歸つた。

思へば此の光榮こそ永久に忘れられない貴いものである。私は我國体の眞髓大和魂の精華が判つた。此の日を一生の記念としこの感激を基に我が帝國の爲に全力を捧げよう。

昭和七年十一月十六日午前三時四十分青白く冴えた夜半の月影と街燈の光が濛の水に映じて靜かにまたゝいてゐる。あたりは森閑として寒空にかすれた犬の遠吠と我等三十三名の力強い足音の他には何も聞えなかつた。

四時二十分彦根驛發車、まだ醒めやらぬ彦根の灯が汽車の窓にぼやけて眺められた。草津の驛を掠めた頃から汽車の窓を頻と雨が打ち始めた。天候の回復を神に念じ乍ら……やがて夜明けと共に憧れの大阪着暗雲低迷する南の空高く大阪城は巍然と聳えてゐた。

淀川公園に少憩の後時遂に到つて我等は晴の城東練兵場に到着、そして躍る心を抑へながら陛下の臨御遊ばされるまで御待ち申上げた。

やがて號報一發霜月の空に響き渡るや一同靜然として咳一つ立てない。みぞれ混りの寒風は頻りと我等の頬を打つ。然るに陛下には畏れ多くも此の風雨の中に青年と共に濡れようとの思召から玉座の御粗末な日覆ひさへも取除きを仰せ出され我等の眼前に於て其れが取除けられるのを拜した時たゞ感きはまつて胸は一ぱいだつた。何といふ大御心の有難さであらう。今更ながらそれがしみく、と胸にこたへた。

やがて壯嚴なる君が代の吹奏裡に陛下の臨御劉曉たる喇叭の音を合圖に大阪第一集團を先頭に愈々八萬人の若人から成る分列式の繪巻物はこゝに繰り擴げられた。待つ間もなく我等第二十五集團は分列の位置に移つた。遙か遠くに一段高く玉座が拜せられる。軍樂隊の奏する音樂に合せて分列の第一歩を力強く踏み出した。又一しきり雨は注いで感激に高調した頬に心よかつた。がそれも暫くの間後はもう何も覺えなかつた。次で起る「頭右」の號令。刹那そこに玉座に立たせ給ひ畏れ多くも我等に擧手の禮を給へる嚴かな御英姿を間近に拜し奉つた時ひやうのない有難さに涙がにじみ出るのを禁じ得なかつた。俗を離れた眞實の日本國民の心が胸の中を奪ひ占め胸は其の喜に高鳴つてゐた。誰もかれも感激の涙と雨に顔はまみれてゐた。

あゝ！此の光榮！日本國民ならでは浴し得ぬ光榮に我等は浴し得たのだ。
青年日本！上に此の御英明の聖天子まし、下に此の忠誠無比の幾千萬の青年がゐる。青年日本は永遠に斷じて亡びない。私は信じて疑はないものである。

慰問文

保坂信吉

どうですか、近頃は。

雪はまだですか。便衣隊は出ませんか。

愈々この十五日に滿洲國が承認されます。日本中は大喜びです。然し浮ついた喜びも滿洲におられるあなた方の事を考へると静かな嚴肅な喜びに變ります。

血と汗。そうです。ほんとうの血と汗を以てあなた方は祖國の爲に戦はれました。僕は一週間の香氣な修學旅行でさへ、ホームシックにかゝりました。一晚の徹夜の演習でさへ、へと／＼でした。

それに一年。三百六十五日。

一家の中堅たるあなたが、色々の雜事あるあなたが。

勿論僕等より數等氣が強いに違ひありません。それかと云つて兵隊たるものがそんな事では駄目だと云ふのは無理解です。

兵隊さん、少くとも僕だけにはこの言葉はなんと快い感じを抱かせるでせう。僕は來年高校を受験します。高校生。あの無邪氣な親しみ易い様子。それに兵隊さんはよく似てゐます。兵隊さん。かう書いて來るとこの言葉にそして未知であるあなたに僕は非常な親しみを感じます。あなたの今してをられる事が目に見える様です。

併し私はあなたに感謝します。理由なしに唯一途に感謝します。この僕の心がやがて飯盒の下でたかれてその火勢をでも助ける様に斬りながら。

林 卓 英

思へば去年九月十八日。我等四五年生は敦賀聯隊へ兵營見學に行つた。其の歸る朝營内掲示板に號外が貼つてあつた。

「十八日午後十時半支那正規兵が滿鐵沿線の柳條溝を爆破した。我が獨立守備隊は直に之と應戦せり。敵は死体多數遺棄せり。我が軍は二名戦死三名重傷此の報は龍山の第二十師團に速達され先づ龍山より多數應援に出動す………」と。

其の前には黒山の如き人が集つて愕然として眺めてゐた。其の中の兵士の中には「おい九師團は屹度出動になるぞ」そうだ支那と戦争するのもこれからだ」と元氣よく話してゐた。事は此處に始まり我等は楽しく眠つてゐる間に滿洲に於いては此の椿事。當時諸兄等は如何にして居られただらう。果して其の夜は此の事が起ると思つて居られたでしょうか。否我等の様に眠つて居られたことと思ふ。こゝに於いて第二の國民たる我等が大いに活躍せねばならぬ。然るに我等は學生なる故此の場合諸兄等に任しておかねばならぬ。我等も大いに行きたい心が湧きたつてはがゆい。切めては出征軍人の見送りでもして我等の意氣を諸兄に傳へて十分に働いて來て貰はうと思つた次第であります。而して事始つてこゝに一年に垂んとするの今日に於て今なほ北滿には暗黒の雲が漂つてゐる。

其の雲を吹き拂はんとして出動してゐられる諸兄等！

我等の後援大なるぞ！ 我等の祈願切なるぞ！ 外に於ける諸兄に恥ぢざる様内に於いては我等は學業に勉むべきだ。氣候の不順な滿洲の地に於いて重大任務を負ふてゐられる諸兄等よ我が國の爲東洋平和の爲亂を鎮定して以て凱旋せられん日を望む。終りに際して諸兄等の健康を祈ると共に滿洲國獨立の承認を祝す。

大日本帝國萬歲！ 滿洲國萬歲！ 諸兄等よ萬歲！

拜啓今や私等の想像に及ばぬ幾百里の國外に邦家の爲献身的努力を發揚して下さるゝ皆様を私等は學窓に學び庭園に散歩する間も滿蒙とともに忘れた事はありません。承れば大陸的氣候たる當地は朝夕温度の差異幾十度に及びて而も惡疾起伏し、實に物凄く尙ほ未だ統制なき滿蒙の怪地には匪賊の襲撃!! 鐵道破壊!! 人家擊襲!! と無暴極みなき匪賊を相手に奪き生命を犠牲にして軍威赫々と警備の任を完うして下さるゝことは、實に卓上論をして及ばざる艱難辛苦の事と深くお察し、渾身感謝の念に堪えません。私等も常に皆様の勞苦とその云ひ知れぬ努力に鑑みて餘念なく勉學に精勵致してゐます。先生や長兄に時々その實話及び報導を聞くとき手に汗して聽收し尙ほ切齒扼腕その匪賊を憎むと共に皆様に對する感謝の涙は、一同身に滲む程でございます。時恰も事件勃發一週年 九月十八日!! 私等の忘るゝ能はざる記念日にして此の意義ある一日を期して愈々舉國一致・東洋モンロー主義に則り、東洋の覇者として匪賊の掃蕩に躊躇することなく積極的邦家百年の大計を樹立すべく一段の覺悟と奮發を劃すべき秋と信じます。滿蒙獨立の昨今外攻に皆様の奮發を願ひ、内に我等共同一致大和魂の發揚に努める事は今や 陛下に忠なる所以であると思ひます。嗚呼!! 北滿に塗炭の苦酸を敢行して下さるゝ皆様!! 不順の大地に愈々五尺の健軀を培養せられ邦家のため奮闘努力して下されんことを切にお願ひ致します。

草々

(一) 北滿洲の宵の闇、
時しも興る爆聲は、
夜風身を劈く長月の、
滿洲鐵道大破壊。

(二) すはこそ大事一大事、
老も若きも幼兒等も、
正義に打勝つ刃なし。

(三) 連戦連勝我が兵は、
暴逆極る支那兵の、
父祖より傳はる大和魂、
かなふ敵にや非らざらん。

(四) 昭和の武神三勇士、
日本刀の切れ味は、
責任重んず古賀隊長、
萬の國にぞ輝ける。

(五) 兵匪退き國立ちて、
我等の清き英靈は、
空にひらめく滿洲旗、
護滿の鬼となりぬべし。

拜啓 酷暑の夏も最早や過ぎ、天高肥馬の候と成りましたが、皆様方には益々御元氣で活躍してゐて下さることゝお察し致します。次に吾々内地の學生一同は常に「國家非常時」を胸に刻み平時に倍する熱と意氣とも以つて勉學致して居りますからどうぞあなた方は内地のことは御心配なく軍務に精進して下さい。我が校の四、五年生は九月十八日に滿洲事變一週年を記念して催される犬上郡の青年訓練や中等學生の聯合演習に参加する筈であります。我等は滿洲の皆様のことを偲びて眞剣にやる積りであります。

滿洲の野の高梁畑の彼方に落ちる眞紅の太陽は定めし雄大莊嚴なものでせう。その他あらゆる景色は日本と違つた大規模なものでせう。日本男子たるものは是非御地で活躍したいものです。それまでに名實共に「世界の樂園滿洲」を皆様の手で作つて頂きたいものです。

又酷寒の冬が迫つて來ますが皆々様御自愛御奮勵の程遠き琵琶湖のほとりよりお祈りしてゐます。

今を去る一星霜、我が帝國の樂天地、滿洲の地は暴惡非道なる支那兵の爲に、戦亂の巷と化したのでした。そして我が忠勇なる皆様方は帝國の爲、日章旗を負つて、寒風肌をつんざく滿洲の野に、雄々しくも國防の第一線に立たれたのでした。私等は聲の續く限り萬歳をさげびました。一生懸命に！

來る月も〜毎日〜！！

正義に勝つものは何物もないのです。そして遂に私等は一國家の現出を見たのです。

之れ、ひとへに我が帝國の威光に外ならないのです。帝國！ 而も戦線に立たれた皆様方の御奮闘に外ならないのです。私等は皆様方の後輩として、帝國の臣民として深く〜感謝する次第です。

將來、尙一層の御努力を仰いで帝國の地位、及び版圖を確立し以て世界に一大革新を加へられん事を希望致します。

滿洲の原野に於て我が旭日燦たる日章旗に手向ふ兵匪、土匪を征し、且つ日本帝國の生命線をお守り下さる皇軍勇士の方々内地は最早麗しい感情の秋がみなぎつて居ります。晴れた夜には月が冴えて、下界を皎々として照らしつけて居ります。毎夜の月は同じく變らないで青白い光を放つて居ります。そして僕はよく此の月を見て、思を滿洲の野に馳せまします。「嗚呼此の月下にも四周を警備する勇ましい歩哨の影があるのだ」此の思ふ時、靜かな靴音がコツ／＼と腦裏を過ぎて行くのです。何時靜寂の闇を破つて敵匪襲來があるかも知れない。此等の事を考へると、皆様方の御心は絶えず緊張してゐる事でせう。酷暑、酷

暑を突破して我が日本の爲、我が權益の爲に雄々しく銃を取られる皇軍の將兵の方々よ、最後に我等日本國民は絶大なる感謝を捧げると共に、愈々御健體に國家の爲御奮闘されんことを偏に御祈り申し上げます。

残暑とは雖も、御當地はさぞ厳しい事と御察し申し上げます。内地も此の頃は暑さ稍に降り早秋氣を覺えます。思ひ返して見ますと、去年の九月十八日の夜の滿鐵爆破加ふるに萬寶山事件等色々様々と、惡の限りを盡した暴虐なる支那兵との粉争も早や一年経過しました。其の爲に尊き犠牲となられた人々の英靈を迎へた時の私達は如何でしたらう。恐らく終生忘れる事の出來ない一つの大きな印象として胸底に残る事だらうと思ひます。今現に支那兵を膺懲し、我が日本帝國の生命線を固守し、國權を擁護し併而我が在留邦人を保護し、帝國の國體をして永遠に不朽の光を放たしめて居られる皆様方に對しまして、どんな言葉を以て謝意を表したらよいでせうか。萬世一系の大君の爲或は皇國の爲全日本國民の爲に、家に親や妻子を残し、姉妹と別れ、兄弟と水盃を擧げて出征して居て下さる方々に對しまして何の顔有つて會はれませうか。我々學生も安閑として居られませうか。我々生徒は充分に其の本分を守り、全能力を發揮し而して第二の善良なる日本人とならんことを心に誓つて居ります。何卒皆様方も色々と艱難辛苦が有りませうが、決してひるむ様な事なく、大君の爲と不斷心に念じて奮闘、一騎當千の勢を以て敵に當られん事を期待して居ります。身は櫻花と散り永へに滿蒙の天地を守つて居られる人々に對して冥福の祈を捧げます。愈々これから本格的な滿洲獨特の氣候が訪れて來ますから御身大切に御奉公せられん事を希ふのみで有ります。

高粱島の暗に消える。

星は頭上に青白く。

内地 黄金の波打つ田のおもて。

蜿々とレールが續く、

山の彼岸の影に消える。

月は頭上に青白く。

内地にも秋が訪れました、静に、松虫の悲哀な音にも、蟬虫の勇壯な音にも、其の他の虫の音にも。二百十日も無事にすんだ田の面にも豊年の穂なみそろへて、湖上にも、一昨日などは百舌のけたましい鳴聲に朝の静寂を破られました。すゞなりの柿の木の葉が二三枚落ちました。あらゆる物を洗ひ清める秋が來ました。さだめし滿洲にも意義深い情味ある秋が征衣の隙から皆様の身邊に冷靜にやつて來たことせう。軍務多忙な折柄御奮闘と御健康とを琵琶湖の東岸より御禱り致します。

北 川 良 一

帝國の威力を示し皇國の爲日夜奮闘して下さる皆様よ、私は今皆様の日夜の御奮闘に對して厚く御禮申し上げたいと思ひます。

内地には愈々秋が參りました。全ての人を感傷的にする秋が!! 皆様も滿洲の夜の曠野に歩哨にでも立つて淋しく獨り居られる時等さぞ郷里の事が懐しく思ひ出される事せう。けれ共皆様は我國の大切な軍人です、元氣で奮闘して下さい、内地の事はちつとも心配せないで。

滿洲にも次第に秋が來る事せう、我々の想像さへもつかぬ苦熱の世界からやつと逃れてホツとされてゐると又やがて零下何十度といふ寒さがやつて來るのですから皆様の御苦勞が御察し申し上げます、でもこれも御國の爲、御体を御大切に元氣で一日も早く凱旋して下さい。私は皆様に對して厚く感謝の意を表すると共に皆様の御健康を御祈り致します。

馬 場 弘 一

茜の色濃やかな夕映に亂れ飛ぶ赤蜻蛉の群、庭の叢に奏でる松虫の音——砥ぎ澄まされた大空に慈愛に富んだ月の光が玲瓏と搖ぎ出づる時、可憐な夕顔がくつきりと浮ぶ風情——これが内地に於ける今日此頃の美しい風景なのです。滿洲にもさうした楽しい日が續いてゐるのでせうか……

諸兄には御壯健であらせられますか？私はいつも新聞の記事によつて諸兄の御奮闘を承はつて居ります。私はその涙ぐましき御働きに唯もう感謝にたへないのであります。我々が安閑としてゐるのが辱しい様でなりません。ほんとうに有難うございます。私は親しくお禮が申したいのですがさう出來ないのです。しかし幸にも今この私のペンをして手が字となつてやがては諸兄の前で厚くお禮を申してくれるのです。さう思ふと大變にうれしく感ぜられるのです。

この私のつまらぬ手紙が親愛なる諸兄と握手する頃には、あの無限の寶倉滿洲は諸兄の手厚い保護の下に悠々と世界の一國家として認められることせう。さう思つてさへも感謝のみです。どうぞ今後よろしく東洋平和の爲大滿洲をお守り下さいでは諸兄！御身を御大切に——。

滿 島 啓 二

滿洲の曠野に酷暑蚊群を物ともせず、或は泥濘膝を没し或は濁水腹を浸す中を、皇國のため、我が權益保持のために、惡戦苦闘しておいでになる皆様方を思ひ出すと、感涙止らず、唯感唯謝のみ。皆様方よ日本には早や涼しい秋が訪づれつゝありま

す。夜になればひんやりとして、蟲が涼しさうに微音をもらします。それなのに残暑未だ去らざる満洲に便衣隊、非道な匪賊の襲來、戦友の死、恩將の負傷、幾多の艱難をこらへて、警備せられてゐます。さう思へば安逸生活は出来ません。又今や我が國が滿洲國承認、そして列國に對して斷乎たる態度を持つた事は、實に難局な秋です。これを突破するには、全く皆様達の兵力です。そして 天皇陛下を中心とする日本が列國の上に立つには、全く兵力に依るより他はないのです。赤露、殺人國米、領土病英、夢遊中華民國は皆我を狙ひながら憎んでゐます。この苦しい外交立場突破は皆様達の腕と忠勇とに依つて脱せられるのであります。どうか御國の爲に目醒しい功を立られ、一日も早く凱旋せられんことをお待ちしてゐます。

藤 川 愈

嗚呼、思へば去年の九月十八日の夜、兇惡なる支那兵の滿鐵線爆破事件に因つて、感情極度に尖鋭化せられた皆様方は遂に戈を執つて起された。爾來權益擁護の爲、我が生命線の爲、皆様方は全世界の注目裡に各地に轉戦された。時は來た、日本の威力を示す時が、全國民は起つた。我等も銃後の一員として、九十餘度の極暑の曠野に一身を擲つて戦はれつゝある我が勇猛果敢な皆様方に、日夜心から感謝してゐます。或る時は滿洲へ派遣される皆様方の犒軍に、又或る時は慰問狀、慰問袋の發送等その恩に少しでも報いんと盡力しました。チリン／＼／＼號外の音、我が軍勝利我等には益々感謝の念が深まつて行く。と同時に我等青年に對して内地での活動心を益々あふりたてる。感謝／＼／＼今や國民は感謝と謝恩の生活だ。時は來た。我が國の意氣と熱とで我が國の正義を説き、又在滿の皆様方が我が生命線を死守し日本をして永久にはえある國となされる時が來た。我等はこの意氣でこの熱で國難を打開させよう。我等青年はこの感謝の心でこの日本の一大事に處して行きませう。最後に我が國は在滿の皆様方の活動に對して感謝し又永へに幸あらんことをお祈り申し上げます。

羽 根 田 辰 男

秋月皓々として高梁の葉摩れの音も物凄しい昨年の秋、奉天北大營附近鐵道爆破を導火線に彼の暴逆不道の行爲に對する私の忍従と寛大とは終に破れ、我が國は日露の役に同胞の屍と血で築いた南滿の地と權益と塗炭の苦の良民保護とに俄然立つて支那と戦火を交へてより二度の秋が訪れた今日、身を劈く嚴寒と水も沸き立つ酷暑と、不足勝な食料と戦器と兵數に惱みつゝ、家を忘れ、故郷を忘れ、其の尊い一身をも忘れ、祖國の爲、南滿の野、轉じて上海附近に獻身な犠牲的な活躍をせられる皆様に、母國の一隅より心からの感謝を捧げます。

我々は新聞や號外の戦況に、皆様方の苦闘惡戦占領の字に胸を振はせ、鬼神の如き皆様方の武運の長久を祈り、何か慰問でもと思つた事が幾度か。しかし此度願がかなつて皆様方に親しくさゝやかな此の慰問文を送り得る事は誠にうれしい。

我々は皆様方が氣候不順に向ふ折柄、只管自愛せられて、我が祖國の爲に、極東に於ける眞の平和の爲に勇躍奮闘せられ、日支の平和の春が一日も早く訪れん事を切にお祈致します。

田 中 宗 一

北滿の野に護國の盾となつて健闘せられる諸兄よ、思へば諸兄は昨年九月滿蒙の風雲急を告ぐるや斷然たつて彼の地に出征せられ、我が 大君の爲に、正義の爲に今日まで御奮戦下さいました。老いたる父母、懐しき兄弟、或は戀しき妻子を後に、後髪ひかれる想の中にも斷乎たる決意を以て本國を船出せられて以來嚴寒極暑をも物ともせず、唯一大君の爲に」と云ふ清き御信念の本に奮戦下さつた諸兄の御姿、身は黒くとも心は赤誠の諸兄の御精神を思へば、たゞ／＼感謝の涙のみであります。同時に又諸兄が匪賊を追討し、萬歳の聲諸共總攻撃に出られる得意の姿を思ふ時、吾等は勇躍の念おくあはらず、羨望に堪へぬ次第であります。諸兄よ、奮闘して下さい。祖國の爲に!!! 我等は諸兄の後を受けてきつとやります。諸兄の背後には諸兄

の血を受けた吾等青年男子がをります。後は御安心下さい。東洋の平和を亂さんとするA國の邪智やC國の横暴を相手に、吾等は正義の刀を以て、諸兄の如く護國の盾となつて働きます。つきせぬ想を限りある紙面に書くことは出来ません。諸兄よ。時候不順の折柄、特に健康に留意して御奮戦下さらん事を御祈り申し上げます。

西 島 輝 夫

兄さん。

内地にも再び秋が訪れて参りました。空は何處迄も青く、高く、さうして遙か彼方で二百十日を無事越した稻と接して居ます。さうして又彼の九月十八日が再び訪れて参りました。思ひ返せば一年前の此の日、滿洲に於て日支戦火を交ふるや兄さんには御出征遊ばされ、其の間酷暑嚴寒を物ともせず、正義の爲涙ぐましい迄の御奮闘、その惡戦苦闘も幾度か、其の度毎に國威を世界に廣く發揚され、又日本男子の意氣を滿天下に表示されました事、我々第二の國民たる中學生否全國民の等しく深謝致す所で御座います。兄さん私達は弱小なりと雖も、兄さんの後に附いて居ります。どうぞ御安心なされ、又御氣を強く召されて思ふ存分働いて下さい。私達は兄さんの後に附いて居るのです。何處迄も、何處迄も、さうして蔭ながら御無事を祈つて居ります。

では充分御自愛あらせられ、御奮闘あらんことを。

居 長 賢 藏

遠く祖國を離れたるあの茫々たる滿洲の大平原に、九月十八日、突然として事變勃發して以來 上天皇陛下は言ふに及ばず下我等國民一同は晝も夜も一途に滿洲事變に心を配り、又邦人達の平和を祈つて居りました。然し支那馬賊は勿論正規兵迄も暴行をなし、或は滿鐵を爆破、或は邦人の慘殺等聞くもいたまじき光景が展開せられました。

而し幸ひにして貴君等が軍人としての職務を全うせられ且又命を賭して國家に報いられたが爲に、あの大事變も漸く一段落をとげました。これは陛下の御稜威を背景として、貴君等の有せらるゝ日本魂の發露なのであります。

事變以來こゝに一周年、滿洲の平野には尙穩やかならざる風雲が流動しつゝあります。貴兄等は東洋平和と我等の權益擁護の爲に夜もろくに眠れないことせう。私はあの茫洋たる大平原に活躍せられる貴君の偉大なる盡力に感謝すると共に、尙益々身体を大切にせられて國家の爲に盡されんことを望みます。

小 山 泰 藏

在留邦人を援けて正義の刃を手に持ちて戦へる兵隊さん、貴君方は零下三〇度の寒天に於ても銃を擔つて哨兵に立たれ、又身を燒きつくす様な酷暑の中に於ても匪賊の出没の跡を轉々と見廻り、或は兵匪と戦はれて如何なる苦心を嘗められた事せう。それに僕等は安閑として日々を過して居るのです。そして兵隊さん達は僕がこうやつてペンを走らしてゐる今の一瞬間も彼の地の同胞の爲に、國家の爲に縦横に活動して居られる事せう。そして中には不幸にも國家の爲に、名譽の負傷をされたかも知れない。そう思へばなんでじつとして居られませうか。きつと、銃後の小國民として役目を果します。農村疲弊も國に居る多くの人々と一緒に力を合せて、打開ませう。どうか御心配なさらなさい。

では皆さん文意は解しかねる處も御座居ませうが、少しでも貴君方の慰問になればよいと思ひます。

どうか呉々も御身体を大切に、
彼の地の眞愛なる兵隊さんに。

懐しい我等の兄さん達よ、我が生命線で日夜御奮闘して居て下さる兄さん達よ、あゝその雄姿が眼前にちらつく様です。

「チン〜チン〜」

號外を配る鈴の音、僕等は兄さん達の正義の御奮闘や、嚇々たる威風の溢れんばかりの寫眞に満たされた一枚の號外を、我先にと引き合つて、そうして兄さん達の懸命のお働きを見ます度毎に、唯々感謝の念が溢れ出て、兩眼には熱涙にじみ、ひとり拳を握り、全身に名状し難い力強さを覚えるのでございます。兄さん達、どうぞ安心して、そして我が日出づる瑞穂の國の爲大君の御爲に、懸命で我が生命線をお護り下さい。實に滿洲國こそ我が重大生命線であります。出征軍人遺族の慰安は今方に盛であります。僕等も及ばず乍らも、御遺族様は力限りに引き受け致しましてお慰め申す決心です。それでは大任を負はれた忠誠の正義の兄さん達よ、どうぞ御安心下さつて、この大任をお果し下さい。兄さん方のお蔭で安樂に暮して居ります僕等も兄さん等の晴れの御凱旋を指折り數へて待つて居ます。

お懐しき兄さん達よ、御變りございませんか。今月で丁度滿洲事變が始つて以來一年たちます。過去を振りかへつて見れば昨年の暮にはチリチンと號外を配る人の鈴の音も喧しい位、否、この鈴の音を待つておりました。今日はどうなつてゐるか、日本の兄さん達ははどうしてゐられるかと待つておりました。昨年の冬、今日は木枯、昨日は吹雪といふ中で馬は鬣の雪を拂ふまで積み、土は凍る野營の雪中に起き伏して我が生命線を守つて我等國民一同の安樂を續けさせて下さつた。あゝ、有難い兄さん達よ！今年になつて滿洲國も獨立して稍鎮つた中に又一事、あゝ、これこそ國難だ。此の國難に當つて下さる兄さん達よ、故國にも秋はソツと参りました。雉がけたゝましくなきます。畑の橄欖の露が青白い月に照らされて光つてゐます。兄さん達も

あの赤土の上でこの月を眺めて故國の事を色々思ひ浮べてゐられるでせう。大君の爲自分の胸に湧き出づる里心を忘れて、守つてゐて下さる兄さん。我等は運動學問に精を出し、立派な國民に爲るよう努力してゐます。最後に兄さん達の御凱旋を期待してゐます。

懐しい兄さん達よ、御變はありますか。此方には早や暑い夏も過ぎさつてもう初秋の涼しい風がそよ〜と吹いてゐます。そして我々は毎日楽しく平和に暮してゐます。そして僕等は、元氣に學校に行く事が出来る。それも皆兄さん達の「お蔭だ」と思へば何と言つてお禮を申したらよいかわかりません。滿洲はどうでせう。漠々とした大野原で玉の汗を出してそれでもかまはず、一生懸命に我が生命線を守つて下さる光景が一度ならず有々と浮ぶのでした。我等は日々新聞雜誌其他の機關で兄さん達の勇姿を見聽する度に益々萬感胸に充ち熱涙が止めどもなく兩頬に流れ出るので御座います。僕等の恩人の兄さん、此の後も元氣に粉骨碎身我國に敵なす者は一人残らず平けて、凱旋されるのを指折り數へて待つてゐます。正しい心を持つて故郷の事は心配なさいませぬその責任は我々です。

僕も大きくなつたら僕の生れた故郷である滿洲へきつと参ります。軍務の暇には面白いお話を聞かせて下さい。

赤い夕陽の滿洲を縦横に活躍し、攝氏百二十度の酷暑と、悍猛な匪賊と戦ひ、我等の生命線と我が權益守護の爲に、奮闘してゐて下さる我が親愛なる兄さんを、少しでも御慰めしようと思ひ筆を取りました。私は兄さん達の勇敢な働きを新聞紙上で知り、心から敬意と感謝の念に堪えません。又滿洲事變突破以來、新聞に出た戦争の寫眞を切り取り、時々それを見ると、兄

さん達の立派な姿を眼のあたりに見る事が出来、涙ぐましくなるのです。私達は何の苦しみも無く平和に暮せるのは、兄さんの御蔭と深く感謝して居ります。どうぞ御体を大切にしてください。

此方は秋の花が咲き、虫が鳴く秋が訪れて、夏の終りを告げるてう。れうが鳴いて居ます。満洲はもう寒いですか。お暇の時に、兄さんや満洲の様子を知らせて下さい。

兄さんは御両親に別れて出征され御淋しいでせう。私には母は無く父も他郷に住む淋しい境遇です。その爲に餘計に兄さん達のことが偲ばれてなりません。

私達は兄さんの勇しい凱旋を一日も早かれと、指折りかぞへて待つて居ります。ではこれで筆を置きます。

馬 淵 頼 信

我が親愛なる兄さんよ、本土は氣候が大分よくなりました。燈下親しむべき時ですが、御當地はどうですか。冬は極寒零下何十度、眠ればそのまま凍死し、又夏は無茶に暑く泥濘脚を没するといふやうな困難な處で我々九千萬同胞の生命線を切り開く爲に命を的に活躍して下さる兄さんよ。地の利を占め多勢を恃む支那兵の爲又不意に襲ひ來る匪賊の爲非常に困りになったことせう。が勇敢なる兄さんは、終にそれらの敵を見事討ち破つて満洲の曠野に日章旗を輝かして下さいました。そして満洲國を建て、我らの寶庫を守つて下さいました。しかしまだ支那兵の殘黨やソヴェト聯邦などが満洲國の周圍にねらつてゐます、兄さんよ、一日も早く圓滿なる解結をつけて、まだ赤ん坊の満洲國を完全にお守り下さい。幾度か彈丸雨飛の中を馳せ廻つて敵軍を惱まし、そして未だ元氣で居なされる兄さんよ、どうか今後も十分に活躍して、元氣で凱旋して下さいを希ひます。

中 堀 正 男

御國の干城となりて滿蒙の地に一命捧げて我等の代りに働いて下さる兄さんへ。誠に有難うございます深く感謝致します。何時何ん時敵彈來りて、尊い御身の御一命奪ふやら、一寸前に流れ弾落ちて、大切な御身を負傷さすやら、計り知れない危険なる場所で、御國の爲と奮闘努力して下さいる兄様達に厚く感謝致します。こんなつまらない便を御読みになる貴方様はどうなつたかは存じませんが、私は能登川驛の附近の者で彦根の中學校に通學して居るものです。若し貴方様が出征せらるゝ時能登川驛を通過せられたるのでしたら、私はきつとブラットホームに出て居た筈です。その時は眞心から熱誠こめて、熱血しほり熱涙流して、めざす滿蒙に出征せらるゝ兄様達を御送り致しました。いや？僕だけではありません。いや、能登川驛頭だけではありません、國土に残る國民皆が心からの叫びで？

あゝ、感極まつて筆が運びません。

新聞で見たり、學校の先生から御聞きしたのですが、此の頃又滿洲地方が悪化して來た様ですが？我が將士の活動は目ざましいものですね。支那軍の奴等を一時も早く泡ふかせ、彼の滿蒙の天地に於ける國權擁護のために、最後まで働いて下さい。そして滿蒙の天地を平和な平和な社會にして、中華民國人も日本人も、否、此所に在住する凡ての住民の樂天世界を作り上げて下さいませよう、献身御奮闘下さいませよう願ひます。

あゝ、御苦勞様……………

兵隊の兄さん達よ。

喜んで下さい、我が日本の特徴を……………

大和魂……………折るべき。

しかし、武運つたなきその時は、

第二の國民僕たちが……。
櫻の如く玉の散る
大和武士の受け得たる
忠と勇とを楯にして
御國の爲と戦はう。

伊 吹 義 雄

最早日も傾きて朝も軒端近く鳴き、窓撲つ風の音、簀の下にゐる虫の聲も朝な夕なは膚寒くなり、虫なく秋、涼しい秋勉強にはよい九月となりました。御兄様達の御活躍してゐて下さいます満洲は如何でありますか、千草八千草の正しい日本人は咲き乱れて居りますか？私は毎日新聞を見る度に御兄様達の勇壯な、我が國の生命線である満洲に御盡瘁してゐて下さる勇姿を見る度に、自然と強き熱涙に咽び胸は高く動悸をうつのです。有難う御兄様!! 御兄様、私達は今、緑樹の下に、樂しき二期を迎へ、古く尊いこの彦根中學校の校庭に親しい學友達と丸くなつて、連りに御兄様達の事を話し合ふのでした。僕はもう聞くに忍びないので今御兄様に御手紙を心の底から眞心こめて御送りするので。ね御兄様僕も僕の村の三井武三さんの家の近くで慰問してゐます。彼は僕等の爲に、御盡瘁して重傷を負はれました。御兄様達は御奮闘幾度か終に憎き敵を降伏せしめられたが未だ反抗してゐます。御兄様目出度く御凱旋して下さい。御兄様の御名譽と功績は實に偉大なものです。僕達の大手を揮つて大道を開歩することの出来る所以のものは、御兄様等の忠勇無双の御蔭に依るものです。御兄様達の勳功は國家を飾る花紅葉、もしくは玉芙蓉です。野山に燃えたつ紅葉と共に御兄様の御健康をお祈りします。

廣 部 智 彰

苦しい酷熱の夏も漸く域を脱し、虫が鳴く、天高く馬肥ゆる秋が訪れましたね。

遙か遠くの天地、滿蒙の荒野に暴れ廻る最も憎む可き奴、匪賊を討伐して下さい。兄様に私は何と云つて御禮を云つてよいのか分らない位です。私は此處に改めて深く御禮を申し上げます。

極寒極暑も物かは粉骨碎身、献身的努力を捧げ、大いに大和心を發揮し、日本の生命線を死守して下さい。兄さんよ。

僕は毎朝新聞に載つてゐる滿洲の記事を見るのが最も嬉しいんです。何時も「皇軍激戦の後十倍の敵を撃退す」といふ記事許りで、實に愉快で肩身が廣くなり、とても感謝の涙が自然湧いて來ます。皇軍の威力の甚大なのに驚き、且非常に頼もしく思ひます。今頃兄さんはどうして居られるでせうと思ふとたまらなくなり、神佛に禮拜して兄様の御健康を祈るのです。此が私にとつて最上の急務かと存じます。

では親愛なる兄さん。勇ましく戦つて軍人の本分を全うして下さい。私も蔭ながら兄様の御健康と、且一日も早く凱旋せられん日を指折り數へて御待ち致して居ります。

鳴 本 光 高

皇國の爲に、我々の爲に、色々な困難と戦つて、滿蒙の荒野に活躍して下さい。皆様方に對して、どう御禮申し上げていいのかわりません。皆様方は我々の恩人です。皆様方無くして、我々は毎日安心して勉強する事が出来ませうか、否、皆様方が一心にあらゆる困難と戦つて、國家の權利、國民の保護の爲に御働き下さればこそです。思ひ出せば昨年の九月十八日、滿洲事變始つて以來、滿洲の廣野は日の丸の旗に翻へり、今年の三月十日、こゝに滿蒙新國家が建設致しました。これも皆様方の御力による所と存じます。私は今も皆様方の勇ましい御姿を浮べます。頭に鐵兜をしつかりかぶり、カーキ色の軍服に身を固めゲートルをしつかり巻いて鐵砲を手に持ち、何と勇ましい御姿でせう。後の事は國に残つて居る我々が引受けますから、どうか思ふ存分に御働き下さい。我國三千年の光輝ある歴史は皆様の御力によつて保たれるのですから。最後に一日も早く凱旋

されん事を御祈り申し上げます。

藤 田 洋 三

正義の爲、帝國の爲、平和の爲に、祖國を後にして遠い滿蒙の野に、重大な守護の任に當つて居られます皆様。

血縁連線たる一億の、我同胞の爲、愛の爲、雲低くたる、北滿の、寒風膚をつんざく冬空に、あゝ颯爽として劍を把られる皆様の、勇壯無比の御雄姿を、我等は胸に描きつゝ、毎日の新聞に號外に、各放送局から發表せられる特別ニュースに、或は血をわかし、或は悲憤の吶を擧げ、或は感謝の涙にむせんだのでした。

殊に嚴冬、零下幾十度と言ふ物凄しい寒氣や、嚴しい暑と戦ひながら、何時襲ひかゝるもしれぬ敵に對して居られる事は、どんなに御苦慮の事であらうと、御察し申し上げます。

國民は其の御奮闘に感激して、九千萬心を合せ、全國の寺社は、熱誠祈願の人が滿ちて居ります。

我等は第二の皆様たる覺悟を以て、勉強にいそしんでゐます。

茲に謹で感謝の言葉を申し上げると共に、皆様の御健闘を、切に祈る次第であります。

湯 本 信 良

滿洲にお働きの兵隊様方、お障りはありませんか。赤い夕陽の滿洲にも、朝夕涼しさがましました事でせう。内地も涼風をよそよとたんぼには、黄金の波がただようて参りました。今に忙がしい刈り入れ時が参ります。かうした事を夢に見乍ら、國家の爲懸命に、お働き下さる皆様。實に感謝にたえません。しばらく絶えてゐた號外の音が、又しても表に聞えて参りました。すぎし一年間の數々の想ひ出が、次々へまぼろしの様に浮び出されます。勇ましき花澤少佐の戦死。多數の敵と少數をもつて當

らるゝ苦勞、かつては父もさうした所に守備した事もあるだけに、いつも語り聞かせてくれます。皆様も寒さ等が向つて参りますから、どうぞ無理をなさらずに、御國の爲、東洋平和の爲、元氣一ぱいお働き下さい。僕達は生命や財産を、保護して下さい。皆様のおかげで、何不自由なく暮して居ります。秋は一ばんよい時です。一心に勉強して、將來御國の爲につくし、皆様の御盡力に報いたいと考へてゐます。大滿洲國にも御力ぞへ下さい。ではこゝで筆を止めます。くれぐれも御体大切に。……

西 堀 文 吉

燈火親しむ頃となりました。滿洲はすでに涼風が高梁の上を吹いてゐる時分でせう。昨年の秋以來匪賊を南北に打滅し大に我が國威を異境の天地にあらはした兵隊さんも此頃は廣々した滿洲の大平原で澄みわたつた、秋の月を眺めてをられる事でしょう。しかしながら未だ匪賊が居るかも知れませんが安心は出来ないでせう。我等は遠く異國の空で我國の爲に風雨寒暑もいとほしに働いて居られる兵隊さんに對して感謝せねばなりません。どうか兵隊さん達も背後に幾百萬の同胞の萬歳の聲のある事を思つて奮闘して下さい。



文苑

さらば……

丹田慶三

嗚呼！ 櫻花爛漫として華やかなる春を喜び、一葉々々木の梢の淋しくなり行き、一步々々凋落に近づく秋を悲しむのは人の常である。野山の樹々は幾度か芽ぐみ又幾度か紅葉して、五星霜は水の如くに流れ去つた。そして我々の中學生生活も、早凋落の秋を迎へ將に終らんとしてゐる。盛者必衰會者定離は世の習とはいへ、去り行く者の心又察すべしである。

我々は先日「我等の前途」と題する作文を作らされた時「我等が前途大洋の如し……云々」と書いた。成程我等の前途

は人生に比すれば實に洋々たるものであるが、五ヶ年の中學生生活にすれば、最早餘す所五ヶ月に過ぎないのである。そしてこゝにも隠し切れない、去り行く者の淋しさといふものがある。

願れば去んぬる五年の昔即ち昭和二年四月、ニューキヤツブ・ニューコート・ニューブリツに身を固め、金釘を光らせ新しい徽章の一中の文字を輝かせつゝ嬉々として、父兄に連れられて校門をくぐつたことは、未だ我等の胸にまざく／＼と書かれてゐる。そして始めて習ふ英語・漢文に幾度か驚異の目を見はつたことだらう。然るに早別れなければならぬとは……。

其の間前庭の櫻は五度花をつけ、四度紅葉し今將に五度目の紅葉をなさんとしてゐる。

沈没せる潜水艦七〇號

小林弘

一

朝日夕日に照り輝く金龜の御城を仰ぎ、無き英傑の昔を偲んだことが幾度あつたらう。そして木々の間かれ洩ら来る報時の鐘の音に、幾度か時を知らされたことだらう。然るに早此の城山ともおさらばである。

今將に秋闈ならんとして、木々の梢は紅葉し朝夕冷氣を感じるやうになつてゐる。そしてやがては梢から漸次に其の衣を脱ぎ捨ててであらう。去年迄は何とも思はずに踏みしめてゐた校庭の銀杏の葉にも、いひ知れぬ懐しさを感じる。そして其の葉をそつとポケットに入れてみた私だ。

巍然として聳ゆる城山よ！ 永劫に變らざる城山よ！ 行方こそ違へ一路成功へと勇往邁進する我等百餘名の卒業生の前途を何時までも眺めよ。さらば……。

五ヶ年間我を育みし學び舎よ！ 我を樂しませし校庭の一木一草よ！ 伸びよ！

今後學校に残る六百彦中健兒よ！ すこやかにませ。總べてのものよ！ さようなら。

一九三二・九・三〇

遙か彼方に黒く延びた淡路の海岸線、その南端より御影六甲の山の上まで銀河が白々とわたつてゐた。

沖にちらつく黄色い大きい燈火は、川崎造船所が製作した潜水艦七〇號が八月二十二日正午過公試運轉中に淡路の假屋沖で沈没したその引揚船の燈火なのである。

潮流の早い海峡である上に、二百十日近くで海が荒れてゐた事は此の惨事を引き起した重大原因の一つだつた。

月に碎ける波に乗つて慌しく逃げる鰯の群の腹が銀色に跳ね返へるのが見えた。それもすぐ波の一搖となつて掻き消されてしまつた。

この月の光も届かぬ三十三尋の下に、八十八の死体が暗黒の中に眠つてゐる。死体を包む「海の寢棺」——そして艦内に侵入する怪魚の姿、それは無氣味な戦慄をなげかけてゐただつた。

外國には四十八時間生きたレコードがあるが、その三倍も時間を經過しておつたそのときに於て萬一をば期待する事

は出来なかつた。

海軍、川崎造船所を初めとして多くの船が沈没艦引揚作業を助けに来てゐた。平定船と作業船とが入り混つて、潜水艦をつなぐ十二本のワイヤーを舷にとりつけてゐた。二百十日が来ない内に早く浅瀬にのり入れて、一氣に起重機で釣り上げる計畫だつた、然し恐るべき暴風雨は其所まで来てゐた。

二

九月一日!!それは我が國にとつて一刻たりとも忘るゝことの出来ない彼の大震災の當日だつた。此の前後に類なき大震災の前には、今までの大珍事潜水艦沈没は風にまふ木の葉の如きものだつた。

その間、潜水艦の艦装委員長で、間もなくその艦長たるべき筈のI大尉は、沈没を自己の責任であると感じて、暴風雨の夜投身自殺をほかり或はナイフを首に擬して幾度か自殺をはかつたが、その都度指揮官にひき止められ、引揚作業に全力を盡してゐた。

三

沈没以來五十九日即ち十月十八日は船に引かれて假屋から浅瀬の方へ海底旅行を續けてゐた「海の寢棺」が泥の内から引揚げられる日なのだつた。

真夜中、アーク燈の下に十四五人のものが甲板に立竝んでもぐり込んだ水夫が死体をズツク袋に入れて麻繩でまいて出すのを一つ、一つ番號札をつけて運んでゐた。

真夜中より朝にかけて收容した死体は十二——
やはり流失せずにあつたのだ、然しあまりにもあわれなりし犠牲の姿よ!

第一に異臭と共に白骨化した死体が表はれたと言ふ。服の名所持品などから鑑別は比較的易かつた、その後續々遺骸は引揚げられた。その中に、この試運轉のときの指揮官とも言ふべきK少佐の表はれた。變りはてたK少佐の姿!

彼がキリスト教徒であつたにしろ佛教徒であつたにしろ、死後に到着すべき歸着點は一つなのである。

あゝ!職務のためにかくまでに自己を犠牲にした英雄の遺骸に對して一國民として、一同胞として誰か哀悼の涙を落さざらんや。

五

海には一つの迷信がある。
溺死者の身寄の者が来ると死体のどこかに血がにじむといふ説である。

一人の遭難將校の身寄の人が言つてをられたとか。

高波が朝から磯邊に嘯みついてゐた。

うす陽さす水中に白蛇の様な、ベリスコープ——
鯨のような潜水艦の脊中が——次々に表はれてきた。
噫々!!生きて水面に浮べば、敵艦隊に最大の恐怖と戦慄を起さしめ、味方に百萬の援軍来れりの勇氣と喜悅を與ふる潜水艦七〇號も大自然の暴威の前にはもろくも海底深くその姿を没しなければならなかつた。かくて八十八の英靈は尊き海の犠牲として——。

慘痛の極なり。悲壯の極なり。

四

朱塗の箇所は灰色にはげ、水垢がくつきいてゐた。
司令塔も、機關室も、後部兵員室も入口の蓋が、はつと無慘に口を開けて、石鹼のやうな泡をぶよぶよ浮かせた、排水ポンプで搔乱されたどす黒い水が一杯に充ちてゐて異様な臭氣以外に何物をも感ぜず。何物をも見得られなかつた。

さらば死体は流失したのか?

最初の豫想では硫酸等の薬品に浸された死体が後部兵員室に恐らく充滿してゐるのだらうと言はれてゐた。然し引揚げられて見て死体らしきものは見あたらなかつた。

「私が近づいて行くと胸のあたりに血がにじんで来た。不思議なものだ」と。

此の様な大悲劇の場合には科學以上の何ものかが起るものだ。

水雷發射管のハッチが閉ちてあつた。その中に幾つかの死体が横はつてゐるのではないか。

現實地獄にあへぎながら

絶望から死までの瞬間を刻んだ遺書がその中にあるのかも知れない。二十日朝二つの遺書を發見した。あゝその二つに表はれたる二つの精神。

二等機關兵 白銀益之助と云ふ方の絶筆。
發射管に横たつてガスのために苦しみつゝ、

吾

發令所浸水と共に

我が武署(部署)

通風管より浸

水のため

三十トンポンプに我はつく

部署だから排水につとむ

吾に電氣なし

職務殉死を待つのみ

本望なり

天皇陛下萬歲

白 銀

此の精神こそ我等が何千年來先祖より受け承いで來た日本魂なのだ。死を直前に見ながら職務のためにつくす、これ以上の日本魂があらうか。これ以上の尊敬すべき精神があらうか。共に死せし幾多の軍人もこの心であつたに違ひないと思ふ。そして我等は感激と悲壯な念に打たれる。

川崎電氣工作部職工の青野金之亟といふ方の遺書

何分水中◇◇(明らかならず)あとは

皆々みてよきよたのむ

一時四十分しづむ

潜望鏡邊青の

たのむ若し助かれればも潜

水艦はやめ

がすにてくるしい

弟にも雪枝しづ子もたいせつに

のかへり途上林君と一緒だった。冷つこい風が頬を打つ。頭を上げるといくつもの小さい星が輝てゐた。その中の一つ大きいのが「上林君、あれが君のお父さんの星だらうか——」

青年 雜 感

佐 藤 正

近時青年社會には懷疑的思想流行し、煩悶のあまり人生の行路を誤まるものが甚だ多い。意氣銷沈國家にとつては最も憂ふべきことである。

西哲曰く「我にその青年をみせしめよ。然らば我はその國の將來をトせん。」と。この様に青年の責任は重大である。青年社會が健全であつたならば、一般社會が腐敗して居様とも何もさう心配することはないのである。

九月廿日の報知新聞に紫山塾生が警視廳で我が國の現状を悲憤慷慨して語つて居るとある。悲憤慷慨は人情の最も麗は

後たのむ

彼青野さんとしては此の遺書は當然かく書くのが普通であるだらうが此所に二つの大きな精神上の差別を認めるのである。

六

八十八の中其の朝までに收容せる死体は八十七だつた。かくて全國に非常な波紋を畫きし潜水艦七〇號沈没事件も一段落をつげた。

時に大正十二年十月二十日。

嗚呼彼等身を軍務に委し、我が海軍のために斃る。

峨々たる山嶽の秀は以て彼等の志に比すべく、洋々たる大海の雄は以て彼等の勇を表はするに足りしものなりき。山嶽の秀、大海の雄、四時變らずと雖も彼等は乃ち今や亡きこと久し。

彼等尊き犠牲の死を想ふて其の忠烈を稱しその亡を哀むべし。あゝ別界にして相隔つると雖も、彼等の靈以て瞑する所あるべし。

英靈安らかなれ。英靈安らかに眠れ。

十一月上旬滿洲での傷病兵を送りに驛へ行つた。そ

しき發露として喜ぶべき事ではあるが、此れ彼等未熟なるものゝ地位に云ふべきことではない。

悲憤慷慨の論談は確かに元氣がある様に見えるが、此れ俗に言ふから元氣であつて眞の元氣ではない。我慢してやり通す元氣や又は何事にも打勝つ精神を持たねばならない。

現代青年は志望のあまりに卑近狭小であり、目前の安逸を貪り勝であり、又元氣のない事が墮落の原因であると言はれる。元氣のない意氣のない事は實に墮落の第一歩、腐敗の端緒である。

現社會は政治界・實業界を始めとして教育界・宗教界に至る迄も清淨潔白と言ふことが出来ない。この有様では帝國の前途が全く危まれる。吾等青年は建國の精神教育勸語の精神に常に従はねばならない。

實力と品性とを養はねばならない。成功は人生終局の目的である。則ち生存競争の勝利の謂ひである。而も生存競争は日に愈々激烈になり、従つて世に處するの道も彌々險峻を加へて居る。激烈なる競争に打勝つて、成功の榮冠を得んには實力と品性との力に依らねばならないからである。

勤勉・勇敢・不斷の努力を以て實力を増し、節儉・師に敬・天真爛漫を以て、品性を増すのである。要するに、學業に進すればよいのである。

托鉢僧

小 篠 一 男

或る夏の暑い日の事である。

裏山ではあぶら蟬があつてよく通る聲でじんじん鳴いてゐるかん／＼照る太陽に屋根瓦が白く光つてゐる。

全てが眞夏の情景である。

と私の前を一人の托鉢僧がこの暑い日中に何處へ行くのか通り過ぎた。

私は托鉢僧の事に就て考へて見た。

彼等はわづかな御布施をもらひそして生活して行く爲にあつて暑い日中を何處へ行くのか知らないがさまよつてゐるのだらうか？

「乞食三日すりややめられぬ」と云ふ言葉がある。彼等もその言葉の様にあつてさまよつてゐるのであらうか？

くり、失業者織々として巷に滿つ。重大なる社會問題として論議される一方世の識者に依つて産業界の革命が叫ばれ、産業合理化の聲漸く高くなりたる状態にある我が國に於て節約即ち緊縮問題が起るのは當然の歸結と云はねばならぬ。

然るに現今の節約の世とは云へ更に節約すべき所は充分にあらゆる方面に存在して居ると確信する。例へば路上に散亂して其の醜狀をさらして居る廣告を見よ、其等は一見見ただけで、或は全然見られないで放棄されて居るではないか。其の一枚の廣告にも、當然人々の努力と幾何かのマネーが投ぜられたものである。緊縮の叫ばれて居る一方、かうした都會の表面に於て、赤裸々に不合理な浪費が行はれてゐる事は吾人の常に目撃する所である。或は競ひて美麗なる裝飾に努力するかの如き、無反省なる陋習が盛んに行はれて居るではないか。更に學校生活に於ても一本の鉛筆、一枚の紙等をも輕視する傾向が見ゆるではないか。

其他日常生活、學校生活、……等幾多の浪費の改善を促したい點が見出されるのである。學校生活の改善には我等學生の自覺が最も重要である。各人が紙一枚、鉛筆一本を使用する時其には幾多の人々の血と汗との結果だと云ふ事を深く深く胸に刻み付けたならば必ずや其等の浪費が無くなる事は火

そしてそれ等が托鉢僧の本來の姿とも云ふべきものであらうか？

夏の眞最中でも冬の眞最中でも暑いにつけ寒いにつけ町から町、村から村を歩き廻るそれが托鉢僧と云ふものだらうか皆然らず彼等は修養の爲あつてあるきそして行を積んでゐるのだ。

暑さに耐へ寒さに耐へそして、つらい思をして托鉢を續ける。皆彼等の忍耐力を養成する爲にやる事だ。

決して彼等は唯なんの目的もなくわづかばかりの御布施にあまへて處定めずさまよふものではあるまい。

托鉢こそ尊い忍耐の修養だよき修養の方法だそして近道だ

一九三二・八・二二

節約に就て

國 島 惠 瑞

現今の行詰れる社會に於て、恐らく節約程重要視されてゐるものは他に無いと冒頭に當つて斷言します。産業界の不振益々其の度を加へ深刻なる不景氣は、全國津々浦々迄吹きま

を見るよりも明瞭な事である。

我が國は、今や經濟上、思想上の二大方面より一大危険に陥らんとしてゐる。此の國難を打破して眞に末永く泰山の安きに置くは偏に我等青年の義務であり、責任であると痛感する。節約の目的も決してそれ自身が最終の目的でなく此により財政の基礎を強固にし國民經濟の根本を培養し、將來非常なる躍進を成す一つの準備に外ならないのではあるまいか。

前途には洋々たる希望がある。我々は此の光明を目標として、緊揮一番更生する大日本を作らんが爲に、邁進しやうではないか。

奮へ！ 昭和新青年よ！ 光明を前に！ 國難を打破せよ。

去り逝く心

安 田 晋 平

嗚呼！ 櫻咲く幼き春の輝かしさよ。

月日は流れて園生の樹々は幾度か芽ぐみ、又幾度か紅葉して顧る五年の中學生活も漸く其の終りに近かんとはする……我等の前途は遼遠にして春の海の如くであるとは、一般の

人の言ふ所であるが、その半面には隠し切れない、去り逝く者の淋しさが漂つて居る。去り逝く心。それは恰も、春の陽が麗かに照る日、そよ吹く風に誘はれて、散り逝く櫻花の心持にも譬ふべきであらう。あの落花霏々として、天空に翻るやその終りは如何であらう。塵埃にまみれ、或は汀に漂ふ。それは丁度浮世の波にもまれ、或は理想を追求して彼岸に達せんとする者に譬へ得るだらう。さうして、一度虚空に舞ひ上つた花は、梢に戻つて咲き揃ふ事は不可能であると同じく吾等の再會は恐らく期し難いであらう。これを思へば吾等は或種の寂寞に胸をうたれる。

願れば五年の昔、新しい制服に身を固め、金釦を光らせて喜んで居た事が淡い夢の様に思ひ出される。櫻咲く樹影に又は若葉薫る學びの窓に、先生の教を受けながら、幼い感激に胸を躍らせ幾度か輝きの眼を見張つた事であらう。

朝日に輝く金龜城——巍然と聳ゆるその英姿を幾度かあかす眺めた事であらう。又時刻を報ずる鐘の徐ろに打出されるのを幾度か耳にした事であらう。その度毎に我々は逝きし英傑の面影を偲ぶのであつた。

やがて一年は過ぎた。二年も、三年も。かうして五年も將に暮れ様として居る。

時は今、秋老いて、冬至らんとする頃である。美しく野山を飾つて居た木の葉も一齊に梢を辞して大地に舞ひ落ちる。

あの木枯に吹き寄せられ、土に頼いて泣いて居る落葉を見れば「あはれ落葉よ……」と呼びかけたくなる。去年まで無心に眺めて居た銀杏の葉にも言ひ知れぬ哀愁を覺える。

去り逝く者の心はあまりにも淋しい。朝に又夕に教へ導き下された先生。學びの途にいそしみつゝある彦中健兒諸子よすこやかにませ。我縊きし學び舎よ、いくとせか踏みしめた緑の芝生よ健在なれ。

永劫かはらない城山よ、揺ぐこと勿れ。而して我等が前途を何時までも眺めよ——。おゝさらば。

凱旋將士を迎ふ

建部俊夫

轟々とプラツトフォームに入り来る列車。

「萬歳。萬歳」歡呼の渦。數箇月の勞苦をその土埃に塗れ酷寒の風雪に曝された鐵兜に偲ばせて將士は歸る懐しの故郷へ。

今や、赫々たる武勳を双肩に錦衣以て母國の土を踏まれたる將士、その喜悅や如何に、その感慨や如何に、されど此の喜びの蔭には或は戦友を失ひ或は負傷に切齒されたる數々の心の傷をもつて居られるのでは無いか。我等は此の勞苦に對し、此の尊い犠牲に對し、謹んで滿腔の謝意と敬意を表しよう。

見よ、その日に絡げた面を、汚れた鐵兜を、幾回とも知れず硝煙に焼つた銃を。列車は轟々と過ぎて行く。その後ろから追ひかぶさる様に再び起る萬歳の聲。情熱の國民の感謝と慰藉の心からなる叫び。

唯感謝だ。正義の爲に祖國の爲に、第一線に活躍せられた將士に我等が捧げるのは之だ。而して我等も亦將來に於て君國に有爲ならんとする事を固く固く心中に誓ふのだ。

金子裕

過ぎし日歡呼の聲に送られ異國の地に赫々たる武勳をたて今懐しの故郷に歸る將士彼等の喜びは如何ばかりであらう。

此の喜びは唯彼等のみの喜びではなく彼等の家族の喜びである我等凱旋將士を迎へるにあつて喜ばしい感じに先んじて

起るものは彼の地に於ける彼等將士の働きに對する尊敬と感謝の念である。喜ばしいと云つても飛びあがる様なそんな單純な喜ばしさではない。涙のこぼれる様な眞の喜びとでも云ふべきものであらうか。この日支事變に於て勇敢なる我が將士により眠りかけた我が大和魂は我等の心の内に甦つて來たこの心を持続し、益々我が國の爲めに働かねばならぬ凱旋將士を迎へる度毎に、この感を新にするものである。

我等は我等の務めを全うし彼等勇敢なる將士の恩に酬いなければならぬ。

那須原邦男

昨年来日支間に於て一大問題が引き起つた我が國民は國を擧げて此の國難に當つたのである。此の問題について終には出兵を見るに至つたのである。我が兵は命を投げ出して國難に當つた事は勿論である。その結果として、今日出度く問題が解決して、將士が思ひ出深い支那の地を後にする事になつた。萬歳々々！。萬歳に迎へられ又送られる事になつたのだ。驛々は將士を迎へる人々でうづめられ、鐵道沿線は日章旗にて色どられ萬歳の聲で天地もゆるぐばかりである。將士の顔

は母國に歸つた喜びで一ぱいだ。迎へる者、迎へられる者、兩者共に喜びの萬歳だ。が彼の一問題のために、國家のため大君のためとは言ひながらも、負傷した者の心中はどんなであらう。思ふもあはれである。負傷者の凱旋！負傷者、此の言葉を聞いただけでも、心の中に一種の淋しさ、悲しさ、あはれさの雲が浮ぶのを禁じ得ない。まして戦死者の遺骨の凱旋は實にもあはれである。あゝ、併しいかなる種類の凱旋も要する所は大君の御爲だ。我が國家のためだ。生きて歸るが名譽ではない。又戦死するのみが大君の御爲ではない。いづれにしても力一ぱい、命を投出して、自分の務めをはたせば其れでよいのだ。何事に於ても。

あゝ、うらゝかな初夏の時我れ等は感謝の心を持つて彼の將士を迎へたい。

學年始めの所感

杉橋均五

憧憬れし彦中のあの校門を一步潜つて赤鬼健兒となつた時より三年間の月日も夢のまに／＼遠く流れ去り吾等は四年生

今こそ四年生だ!!胸に溢るゝ涙あり、肢体に漲る熱血ありこの手この足の心力の限り清めつゝ愛情と服従とをモットーとしてこの彦中の氣風を益々改善し、發揮し、天下の一中たらしめ、吾等が凡ての瞬間をして向上の過程進歩の過程、而して勝利の過程たらしめよ。今や櫻花繽紛として地上に落つ吾等の心は愈々切である。

辻威雄

我等が中學校に入學してから早や三年の月日は流れた。我等は中學課程の半ばを終へたのだ。我等はあらためて卒業後の志望を確立しなければならない。

我等が前途には幾多の山があり、川があり何處に暗礁があるかわからない。確固たる信念の下に希望に向つて勇猛邁進する時我等の前途の障害物を取り除くものは即ち忠實なる勉學に外ならない。

我等が勉學に専念する時、そこに熱と力とを生じ我等の難關も容易に突破することが出来る。

忠實なる勉學、これこそ我等中學生の本分である。我等の勉學の船は今や將に帆を上げて大洋に向つて進まうとしてゐる。

となつた。顧みれば三年生になつたその時にあれ程固く心に誓つたその年を只有耶無耶の裡に空しく葬つて終つたのだ。何故だらう、意志が弱かつたのだ、あの誓の神髓を眞に理解して居なかつたからだ「初めは實に間一步の差、歩み出す其の一步も三里の道を歩まんとする一步、千里の路を行かんとする一步、其の決心の異なるに依り其の結果は異なるのである」この事實を思ひ起して四年生になつた時には更に更に強固な決心をしたのです。最も迷はされたのは上級學校志望でした何校に受験しようかと頭は不統一な脳味噌で充滿し廻燈籠の繪の様に諸學校の徽章が翔け廻るばかりでした。確に迷つて居ました。餘りにも理想にのみ囚はれて現在の私を忘れておたのです勿論強い一鞭を加へました脳味噌が統一して纏まつた考へが一瞬間めいた様な氣がしました。吾等には重大な現在の使命があつたのです、尊い吾等の使命こそ只管勉學に精進する事以外の何物でも無い、實に今日の否現在の一步は他日千里の差を生ずるのである。叩けば開く向上の一路を辿り希望の光を仰ぎつゝ四年生こそはもつと／＼有意義にもつと／＼實行的にもつと／＼貴く生きよう、これこそ今の僕の心のありの儘である。實際自分の過去を振り返つて熱々眺める時餘りにも貧弱な情無い過去の自己が責めたくなる。

我等の勉學の車は今や坂を登らうとしてゐる。我等が勉學にいそしむ事は舟の帆やかぢをあやつり目的地に向つて航海し又車を一步一步と頂上に引き上げるのに外ならない。我等の心に怠慢が生ずれば船は波に覆がへされ船は逆航し車は坂からころがり落ちる。

故に我等は諸先生に従ひ忠實にまじめに自己の本分を完うする事が重大である。

我等の教科書を確實に理解すると共に、餘力あらば他の参考書なり有益なる雜誌を読むことは甚だ結構である。

自己の勉學の船の進路をふりかへり又羅針板を見又車の後をふり返りて常に眞直ぐに進むことが肝要である。これ即ち反省である。船の帆網をしめ車をしつかり握つて一路希望に向つて突進しなければならない。

自分は四年の始めにあつて此の感を益々深くするのである。

有川紀久

新しい教科書のインキの香、隅々の美しく斷たれた手觸り

のよい表紙、ノート、机の端に置かれたサボテンの植木鉢、眼に映る凡てが何かは解らないが、今日の眼には新しい光と力とに充ち満ちて居る様に思はれる。併し深く考へて見れば新しい教科書も、ノートも、幾多の人手を借りて出来たもので、厳密に言へば少しも新しい物ではない。それどころか天地日月草木亦其の間に生存して居る人間凡て無限の昔より永遠の未來へと永續しよう。だのに其の古い萬物を眺めて新しいと感ずるのは、人間の心が造り變へられたからだ。清められたからだ。清められた眼心で萬物を眺める時始めて其處に力あり、光あり、生けるが如く見られるのである。其の時人は「此年こそ、此度こそは」と心を新たに引きしめ、天地に向はしめる偉大な力を與へられ、新たな希望に甦させられるのである。此の時に當つては、未來には何の邪魔者もなく、何んな苦しみをも突破してやらうと意氣込むのである。四年と云へば上級生で先には一大階段又大障害が横たはつて居る。併し新學期の心持でやれば、此等をも踏みにじり得る様である。何度新學期は來ても常に今一度人の心を作り變へ「此年こそは」と云ふ力強よさを與へてすぐて行く。

橋本 末藏

第四學年の新學期を迎へて我等は心のそぞろにときめくを感じると共に、其の反面に於て何かしら重大なる使命を背負はされたやうに感じる。

「つい先日までは上級の人達が各自の志望する上級學校への試験のために追ひ廻されてゐたのをまるで他の事のやうに眺めて來たけれど、そんなに考へてゐた我等が、其の同じ道を踏みかけてゐるのかと思ふと、何となく厭なやうな、悲しいやうな、だが又前途に光明を得たやうな言ふに言へない複雑な感情の交錯した氣分に浸つてしまはざるを得ない。何の心配もない楽しい期かな中學三年生でいつまでもありたいやうな氣もする。

併しながら左様な女々しい心でゐられやうか。我等の前途は遠遠だ。そして又我等の志たるや大なる事山岳にも比すべきである。あゝそして我等が前途に横はつた幾多の難關をどしどし己が力で踏破せねばならないのだ。自己の定めた最後の目的に向つて力のあらん限り勇往邁進せねばならないのだ。頑張りなんだ!! 頑張りなんだ! 目的到達のために最後まで頑張り通すんだ。

井上 八右衛門

春だ! 春だ!! 觀櫻の春だ! 勉學の春だ!! 吾等の勉學の春だ! 春は人の心を浮き立たせる水に浮ぶ木片の如く沈め沈め。吾等は春に浮かされるな。吾等は四年になつたのだと思へば一瞬としてじつとしてはをられない。進め! 勵め!! 前途高遠なる理想に向つて。健康! 勉學! 頑張り最後の勝利は健康と勉學にある。

戦友の屍を越えて 突撃す 御國の爲に、

大君に捧げし命 あゝ忠烈 肉彈三勇士。

廟行鎮鐵條網を 爆破せん 男子の意氣ぞ、

身に負へる任務は重し あゝ壯烈 肉彈三勇士。

斯くの如き意氣込みで進め。斯くして勝利を得よ。最後の一路は勉學だ。勉學なくして勝利を得る筈はない。

勉學だ! 勉學だ!!
健康だ! 健康だ!!

故郷

片岡 四郎

「兎追ひし彼の山、小鮒釣りし彼の川、夢は今も廻りて思

ひ出づる故郷、いかに在ます父母、つづがなきや友……」
幼い日、小春日和の和かな光に照らされてこんな歌を歌つた事があつた。

それが今では本當になつた。兎を追つた彼の山、小鮒を釣つた彼の川はないが、彼の地に父母は在さずとも、なつかしい思ひ出、楽しい過去、幼い日を共に暮らし、いたく御世話になつた祖母がある。故郷の山、海、草、木が皆なつかしい。今になつて彼の日を思ひ出せば、美しい故郷、楽しい思ひ出のみが繪巻物の様に繰りひろげられる。

春は毛利邸前の櫻が爛漫と咲き亂れ、畑には麥が一面すく／＼とのび、所々菜の花が春の光を浴びて咲き盛つてゐる。夏は波靜かな鼓海に楽しい一日を過し、又爽かな朝のお参りをした熊野神社の美しい眺め——向ふの島、近くの大船小船が眠から醒めた様に浮んで、小波が朝の喜びを歌つて居た眺めも忘れられない。青い／＼空が高くはてしなく續いてゐる秋日和の日には、金色に照つてゐる野に、はた又紅葉の美しい岐山の麓に、暖い秋の陽光を浴びて、歌ひながら寫生に行つた等々、思ひ出の糸はつきない。十有餘年の年月の間に起つた事が、皆楽しい思ひ出追憶のみ。
おゝ、美しい吾が搖籃、懐しい吾が故郷!

故郷の空を毎日飛び行き、飛び歸る鳥がらすよ、故郷は如何に變化してゐるか。

田 中 宗 一

故郷!!! 何と云ふあたゝかみのある言葉だらう。何と云ふ親しみのある處だらう。この言葉を聞くだけでも幼時から遊びなれた野原や田圃、お寺の前庭等々、それからそれへと過去世の追憶が胸の中に甦へつて来る。彼の寂しい一農村がどうしてそんなに懐しく感ぜられるのだらうか、かの文豪子規は云つた「花にも、月にも、樂しみに、悲しみに、尙住みたきは故郷なり」と。されば何故そんなに故郷に住みたいのだらうか。彼又曰く「父母あるが故に非らず、兄弟あるが故に非らず、ただ故郷にこそ住みたけれ」と。吾人の故郷に對する敬慕の情はただ何となくなのだ。無意識的に湧いて來る思慕の情はこの「何となく」の四文字に包含されるのだ。吾が故郷は天下の名所でも無ければ、華やかな都市でもないただ自然の恵に生きて行く寂しい一農村なのだ。それでも矢張故郷はいゝ處だ、なつかしい所だ。村の中央にそびえ立つ老松、絶えず流れる小川の水、夕を報ずる寺院の鐘までが、

或る神秘的な威嚴をもつて、吾人に呼びかけてゐる。其の各々に含まれる牽引の力こそ吾人をして故郷を敬慕せしめ、讚美せしめる偉大さのある所以なのだ。此の大自然の恵み深き故郷の地に、清々たる空氣を吸ひ込んで成長し、志を立て、他郷に出で、業成り功をさむれば錦を着て故郷に歸り、失敗すれば骨となりて故郷に歸る。故郷に生れて故郷に死す。世に青山は多くあるけれども、青山中の青山は矢張故郷だ。故郷の青山に骨を埋めたいとの慾望は人間通じての情なのだ。黙々の中に僕を育ててくれた此の故郷、自然の中に血が通じてゐる此の故郷、この故郷に對して愛着を感じるのに、何の不思議があらうか、否、こゝに愛着を感じることを情あるものゝ美しさではあるまいか!!

あゝ、我れを生み且つ成長せしめてくれた故郷よ!!! 永遠に變らずにゐてくれよ!!! 永遠に變らずにゐてくれよ!!! 僕は無言の指導者故郷に敬意を表し、これを讚美するものである。

齋 藤 數 衛

故郷は自分の何よりも大なる力強い後援者ではあるまいか

たへきれぬ惱が襲ひきたつた時その奥深い大きな惱に引きさられ絶望の地に落ちんとする時、混乱した頭に一抹の力強い光を投げ與へるものは、何よりも忘れ難い故郷を仰思したときなのである。あくまで澄んだ清い力を持ち、幼ない自分には唯一の慰安者ともなり後援者ともなるのは、如何なるものを以てしても打破できない懐しい故郷なのである。

春の夏の秋の冬の故郷——そして搖籃時代の幼な友達や老いた祖父母の住める故郷——幼かりし自分の相手になつてくれた樹木も生ける動物も、幼くして文豪家たらんと欲せしめた幽邃な山奥の時雨も、落ち行く秋の夕陽も、銀のすゝきの葉蔭でうるんだ目で青空をながめたのも、澄んだ中空に浮ぶ桃色の雲も、廣い野原の陽炎も、流れ行く利根川に思ひをこめたのも、西空に眞赤に焼けた淺間山も、皆すべて感じ切れぬ奥深い何物かを持つて遠い山河の向ふに年を加へてゐるのだ。此等に對する純な觀念が自分の心の一つの清い泉をなして存在してゐることを感ずる時は、いひしれぬ慕郷の感におそはれまた同時に自分は力強い幸福を感ずるのである。

人間味を味ふ唯一の目標となり源となるのを固く信ずるのも事實である。人間味の存在は故郷の存在である。故郷の存在は人間生活を通じこの大なる背景であり後援者である。自

然の文化の愛がいかに強いものとしても、故郷の我等に對する情愛は到底斷ち切れぬ絆によつて結ばれてゐるのだ。

あゝ故郷! 何となつかしいものだらう。人はすべて故郷あつてこそ眞の人であると。

井 口 敏 彦

「春高樓の花の宴、めぐる盃影さして、千代の松ヶ枝わけ出でし、昔の光いまいづこ」。

何百年の昔榮華を誇つてゐたお城も今は全く朽ちはて、見る影もなく、唯數へる程しか残つてゐない古色蒼然とした樓閣や、礎には苔や、葛が一面に這ひ廻つてゐるが、併し其の中には、云ひ知れぬ莊嚴な氣が残つてゐる。

華なりし昔から、一度も變つた事のない靜かなお濠の水の面に、滴らんばかりの緑が照り映えてゐる。

春になれば、その深緑の中に、萌える様な若芽が混り、ちらほらと山櫻が咲き乱れ、そよ吹く風に散る花びらが、蒼い蒼い水の上に流れて行く。石垣のたんぼぼ、すみれ、白く咲いてゐる藻、其等の花の上に、春の日がうららかに照つてゐる。

秋になると、見渡す限り黄金の波が遠く南に続き、秋の空か、湖かと疑はれる程蒼々と澄みきつた水が、秋の空を連る所に、鳥が一つ二つ浮んでゐる。

この様な詩的な景色、之が僕の故郷です。

生れて十有六年、毎日／＼少しも飽きず、何時も美しく眺めてゐるお城も、湖も、全ての物が現す事の出来ない神秘をひめてゐます。

之が僕の故郷、彦根なのです。

丸岡芳之

「住めば都」と云ふ諺があります。私の故郷は田舎であります。伊吹を毎日彼方に仰ぎ何ら都會めいた事はない田舎の故郷です。

都會の如く、文化的なものは何一つありません。唯一日三回、乗合のガタ自動車を通るだけです。併し私は其の田舎に甘んじてゐるのです。惠愛の父母あり、親愛なる友あり、又恩師ありて、私等の故郷こそ唯一の慰安を私等に與へてくれるのです。

物質的の都でなく、心の都なのです。

人は總て故郷の一部分であるから、それから離れて如何して安定な、正しい生活が營み得られようか。

特に我々日本人は故郷を慕ふ事が甚だしい。之は日本人として長所とも見られるが、又一面に短所とも言ひ得よう。風光明媚な我が國土は古來多感多情な日本人を育成するに至つた。それ程國土と國民生活・及び國土と國民性格とは離れ得ない深い／＼關係にある。

蝸牛が常に殻を背負うてゐる如く、我々は亦故郷と離れては到底生きて行かれない。

平居龍太郎

故郷は誰にとつても戀しい懐しいものだ。

「到る處に青山あり」等言つても、萬人は故郷で餘生を樂しみたい、故郷で死にたいと願つて居るだらう。

その故郷が身を立て、學を究め、財を爲すの地で無い事を知つて居ても尙故郷が戀しい、故郷に住みたい。

御両親や、はらからが今は故郷に住んで居られぬとも、尙故郷こそ戀しいものだ。

人が故郷を思ふ時、そは心の純な子供心に立ち歸る時だ。

去る五月の樂しかるべき修學旅行も、日光邊りから味氣ない旅行になりました。不便ではないのです、何から何まで。唯故郷戀しく心の疲れを覺えたからです「故郷なればこそ！」と深く／＼感じました。歸へれば心がのんびりとして氣が清々したからです。

旅に出れば故郷戀しとは何人もよく口にされる言葉ですが私も痛切に感じました。

故郷こそ私等の唯一の慰安所でありませう。

島本良三

故郷を慕ふのは人の切々たる情である。

我々は故郷を自然の父母として生ひ立ち、育つて來た。其の一本一草は、神の如き靈妙不可思議な力を以て我々の胸に逼る。我々は故郷に在る時最も質朴で、從順で、善良なのである——、丁度父母の膝下に於てさうある如くに——。それ故に「故郷は自然の父母なり」と言はれる。而して一度郷關を出づるや、一入故郷戀しの情に驅られる。故郷を離れると淋しい。各地を浮浪して、其の日／＼を送る者、所謂ルンペン心の虚無なるは、要するに故郷を離れてゐる故である。

あの岡で、あの川で、幼な友達と戯れた、その追憶は、心の悩み、悶え、苦しみを川に投げ捨て、呉れるばかりか、天國の園に遊ばして呉れる。

世の文化の進む限り、それは不可能なる事だと知つて居ても尙「故郷よ、永遠に昔の姿たれ」と、人は叫ぶ。

遠く異境にある人達は、故郷をどんなに戀しく思つて居るだらう。思ふだに尙浅い事である。

西村久雄

故郷の山川は懐しいもの、第一に數へらるべきものである。東に鈴鹿の連峰を望み、北に靈峰伊吹を戴き、西に洋々たる琵琶湖を控へたる近江平野の一角が我が故郷である。

朝に鈴鹿の山頂を仄かに露はし、夕べに比良の山脈を眞赤に焼き、或は琵琶湖の湖上に金波銀波の漣を造る月も亦我が腦裏に刻みつけられた偉大優雅な故郷印象である。

村の中央を流れる小川、いづこより來るかは知らねども、田圃をくね／＼と流れて春夏秋冬潤れる事なく、現實の悩みにこたはる事なく／＼と流れて行く。春紫雲英の咲き揃ふ頃は、小さき子等が尻からげして小籠持ち魚追ひの絶好の